

5 机上から実地まで知識・技術・団結力を高める発生農

場班実践演習

熊谷家畜保健衛生所

○遠藤 みちる、山中 梨沙

I はじめに

本県では、高病原性鳥インフルエンザ（以下、HPAI）をはじめとする特定家畜伝染病が発生した際、発生地域を問わず当所が「発生農場班」として殺処分等の防疫措置を担当する。発生農場班は家畜の殺処分やその死体の焼埋却、農場内基地の設営・管理、一般動員者の指揮及び防疫資材・機材の管理など、発生農場に関する業務の全てを所掌する。

発生農場班班員は、防疫措置経験の有無を問わず、直ちに現場指揮を行わなければならないため、全班員が発生農場班で必要とされる知識・技術を習得しておく必要がある。しかし、人事異動に伴う班員構成の変化や、年度による特定家畜伝染病の発生頻度の相違により、班員の防疫措置経験には差が生じている。

従来、当所では班員の知識・技術向上のため、HPAI疑い時の採材・簡易検査演習やHPAI発生を想定した机上演習（農家からの聞き取り、防疫資材必要数の積算、防疫措置スケジュール・動員計画の作成等）など、「通報から防疫措置開始まで」の演習を中心に実施してきた。このような従来の演習のみではこれまで確立してきた発生農場班の知識・技術を全班員が習得するには不十分であることから、令和7年度に班員の知識・技術の平準化及び向上を目的に、発生農場班に特化した「班員の役割・業務についての座学」、「HPAI採材・殺処分演習」、「発生農場基地設営演習」及び「フォークリフト運転演習」の4つの演習を実施した。

II 新たな4つの演習

1 班員の役割・業務についての座学

本演習では講義と机上演習を行った。

講義では、発生農場班の役割を「誰が・いつ・何を」という観点から明確にし、班員の共通認識を形成することを目的とした（図1）。発生農場防疫措置経験の豊富な班員を講師とし、農場から通報を受けたのち殺処分開始までのスケジュール、殺処分前の評価や殺前採材の方法などの初動の流れ、過去の発生事例を元に農場における一般動員者への作業説明、殺処分の具体的な方法、実際にあった現場での課題や反省点、その他資材・機材の管理や一般動員者へのケアなどについて講義を行った。その結果、特定家畜伝染病発生時の基本事項から、マニュアルには記載しきれない個人の経験的知識まで、班員同士で幅広く共有することができた。

机上演習では、農場内での基地設営のポイント及び注意事項を理解することを目的とした。管内の養鶏農場及び養豚農場での特定家畜伝染病発生を想定し、全班員が各自で基地設営場所及び農場内動線を事前に検討した上で、個々人の設営案・作業動線案について議論した。このディスカッションを通じて、基地設営時には電源・水源や動員者の休憩場所を確保すること、バスの発着場所及び近隣住民への影響を考慮した動線とすること、また、車両と動員者の出入り口を分け事故の危険や交差汚染を防ぐ必要があることなど、複数の要検討事項が存在することを改めて確認・整理した。



図 1 講義

2 HPAI 採材・殺処分演習

従来実施している HPAI 疑い時の採材・簡易検査演習に加えて、炭酸ガスによる殺処分演習及び防疫資材の改良を実施した。

採材・簡易検査演習では、生鶏及び死亡鶏からの採材手順、簡易検査の手順及び生鶏の採血方法など、HPAI 疑い時の検査に必要な基本的な手技を習得することを目指した。これにより、全班員が通報時に農場に出動し、適切に採材・検査が実施できる技術を身につけた。

殺処分演習では、炭酸ガスポンベの取扱い方法やガスホース着脱方法の確認及び炭酸ガスによる鶏の殺処分を実施した。演習を通じて、炭酸ガス取扱時の注意事項及び殺処分に必要な炭酸ガス注入量に関する知識を習得した。

資材改良では、捕鳥の際に使用するプラスチック段ボールシューター（以下、シューター）及び運搬台車の改良を実施した。従来、シューターは「高段ケージ用の 180 cm 型」と「低段ケージ用の 60 cm 型」の 2 種類を作製・備蓄していた。180 cm 型は高所作業に有用である一方で、重量が大きく、運搬・取扱上の利便性に欠けていた。60 cm 型は扱いやすいが、中段ケージ作業時には短すぎるという欠点があった。班員からの意見も踏まえ、今回は取扱いが容易で中段ケージの捕鳥に有用な 90 cm 型のシューターを新規作成した（図 2）。運搬台車については、従来、台車にポリバケツをただ乗せただけのものを使用していた。捕鳥後の鶏はこの台車上のポリバケツに投入して鶏舎内

を運搬するが、路面状況の悪い場所では安定性に欠け、また、鶏取出時に毎回ポリバケツを台車から降ろす作業が必要であった。更に、台車とポリバケツを個別に収納する必要があることも課題であった。そこで、今回、ポリバケツに平台車を取り付け一体化したものを作成した（図 3）。これにより、安定性及び作業効率が向上し、重ねての収納も可能となった。これらの資材改良は、班員は現場での作業をより具体的にイメージすることができ、より迅速な殺処分の可能性について検討する機会にもなった。

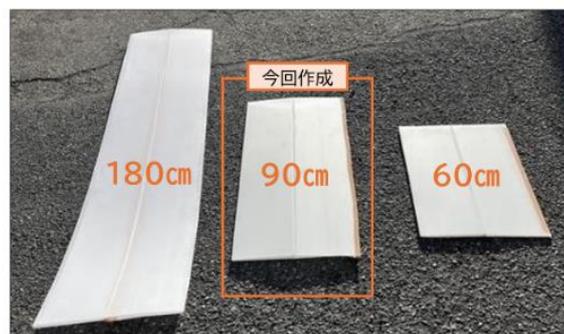


図 2 90 cm型シューターの作製



図 3 運搬台車の改良

3 発生農場基地設営演習

本演習では基地設営及び防疫機材操作演習を実施した。

基地設営では、基地設営能力の向上を目的に基地エリア設置完了までの時間を計測した（図 4）。演習の中で、床材の保管・敷設方法や雨天時にテント間に取り付ける雨どいの設置方法などの課題が発見され、演習内で対策を検討し改善を行った。テント設営未経験 2 名を含めた作業人員 6 名で実施したところ、約 1 時間で完了した。実際の特定家畜伝染病発生時には、発生農場班の班員 1 名と農林部職員数名で限られた時間内に基地エリアを設置する必要がある。また、基地設営場所の検討及び路面状況によっては、本演習以上の時間を要することが予想される。本演習を通じて、必要な作業のスピード感を体感するとともに、現場指揮の技術を習得した。



図 4 基地設営

防疫機材操作演習では、エンジン式動力噴霧器と発電機の操作手順確認及び操作手順に関する実技試験を実施した。これまで、これらの機材の取扱いについて学ぶ機会は主に現場での引継ぎに依存しており、故障時の対応などが円滑に行われていない状況であった。本演習では操作手順に加えて機材の構造及び仕組みを学ぶことで、班員は一般動員者への操作説明及び故障時の対応力を習得した（図 5）。



図 5 エンジン式動力噴霧器の構造説明

4 フォークリフト運転演習

本演習は、フォークリフト技能講習は修了しているものの実際の運転経験が無い班員の運転ブランクを解消することを目的に実施した。多くの農場で使用されているマニュアル仕様のフォークリフトを演習に用いることで、クラッチ操作をはじめとするマニュアル車の運転技術の向上も併せて目指した。運転経験豊富な職員の指導の下、運転操作の確認及び農場内での運転を想定したパレットを用いた操作などの演習を実施した（図 6）。終日にわたる演習を通じて、一通りの運転操作を体得し、最終的には密閉容器を積み上げる繊細な技術の習得にまで至り、フォークリフト運転技術のレベルアップを達成した（図 7）。



図 6 フォークリフト操作演習



図 7 密閉容器積み上げ

Ⅲ 成果とまとめ

今回実施した発生農場班に特化した演習は、「平時に汗を、非常時に結果を」というスローガンを掲げて取り組んだ。

演習は班員の知識・技術の習得及び向上に大変有用であり、防疫措置未経験者は発生農場班の役割を学習すること及び、業務内容を具体的にイメージすることができ、当事者意識の向上につながった。一方、防疫措置経験者にとっては知識の再確認の場となり、過去の発生事例を通じた反省点及び改善点を認識する良い機会となった。更に、知識・技術面での成果に加えて、演習の実施を通じて防疫措置未経験者と経験者の相互理解も深まり、班員同士の結束力が強化された。

令和7年12月30日に嵐山町で発生したHPAIの防疫措置では、改良した資材の活用及び農場内のフォークリフト操作など、本演習の成果を早速発揮することができた。また、班員一人一人が事前に個々の役割を認識していたため、班員同士の連携が円滑に機能し、県内

の発生規模としては過去最大であったにもかかわらず、当初の防疫措置終了予定日より3日早く終了することができた。

今後、廃業した農場を活用した演習及び殺処分から焼埋却までを含めた演習など、より実践的で効果的な演習を反復実施することで、班員の現場対応力及び班の組織力を一層強化し、迅速かつ的確に対応できる「発生農場班」の構築を目指していく。